

海上の森ミニセミナー第11回

「そのタネ、播いてみよう！～芽生えから見つめる植物の世界～」

話題提供者：廣永 輝彦 氏（株式会社 地域環境計画）

○プロフィール



（株）地域環境計画の名古屋支店に所属している。やや特殊なサラリーマンである。

会社では主に昆虫を担当している。

それぞれの専門で「何屋」さん、という言い方をするが、私は「虫屋」と呼ばれている。

○海上の森との関わり

一昨年、外来種の調査時に、新種と思われるハナアブ（マドホソアリスアブ）が海上の森で採集された。これまで数例しか記録されておらず、幼虫も見つかっていないので、実際にどのような生活をしているのかは不明である。これをきっかけに、昨年3月から海上の森のハエ目についての調査を開始し、1ヶ月に1回通っている。



○なぜタネを植えるのか



2009年から、拾った草木の種を何でも植えている。小さなポットに種を播いてそれを生やして観察している。

「虫屋」がなぜ「植物」なのかというと、昆虫の勉強と植物の勉強は「一本道」だからである。植物のあるところには昆虫がおり、その昆虫を食べる昆虫が来る。植物がどれだけわかるかで、昆虫に対する見え方も変わってくる。海上の森においても、植物の葉を食べるハムシやチョウがいて、その幼虫に寄生するヤドリバエがいる。また、植物に生える粘菌類を食べるといわれるベニボタルなどの昆虫もいる。「植物1種には3種以上の昆虫がつく」ともいわれていることを考えると、さらにその昆虫を食べる昆虫・関わる生きものは相当な数になることがわ

かる。そのため、昆虫を調べる身としては植物も勉強することとしている。

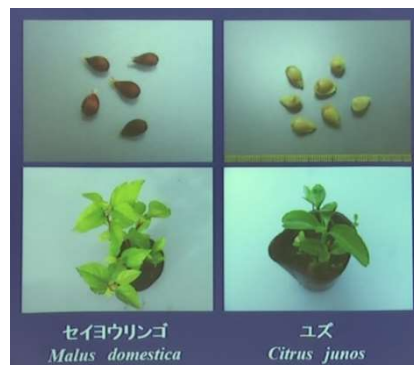
例えば、アゲハ類をみると、アゲハチョウはミカン類・サンショウなどを食樹とし、キアゲハはニンジン・セリなどを食草としている。成虫の形態は似ているが、幼虫の食べ物や形態、分布も異なっている。

形態で見分けがつくものはその場で見分ければよいが、見分けが付きにくいものもある。ドウガネツヤハムシとアオグロツヤハムシの例では、大きさも小さく、肉眼では見分けにくい。しかしながら、ドウガネツヤハムシはタラノキを食樹とし、アオグロツヤハムシはコシアブラ、タカノツメ、カクレミノなどを食樹としているため、ついでに植物をみれば種が分かる。このように、植物を覚えると、昆虫調査の成果に直結するのである。

○ポット植えの方法

家で食べたリンゴ、ユズ、カリンやナシなどの種を播いておくと、ちゃんと芽が出る。しかし、出張など仕事の都合があるため、「植物の栽培は無理だな」と思っていた。そんなとき、2009年に大家さんから誕生日プレゼントにアザレアの鉢植えをもらった。気にかけていただいた感謝の気持ちと、「枯らしたらどうしよう」という気持ちがあった。

鉢植えを育てるにあたり、「いきものどもの、いつかは死ぬ」「育てるあなたが“ご主人様”」「無理はしない」「ご縁がなくても仕方がない」と開き直すことにし、ついでに育ててみたかった種も播いてみることにした。



・手法（全種一律）

ポットサイズ：径6センチ

水やり：朝・夕、出張のときは受け皿に水をためる

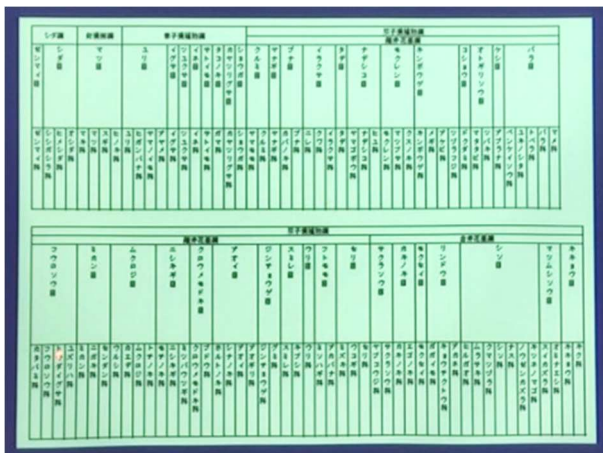
日当たり：ときどき日なた、ときどき日陰

土：小粒の軽石と腐葉土のみ、7：3くらい

・必要なもの

腐葉土、軽石、受け皿、ポット、ラベル

○ポット植えのメリット



育てた植物を、仕事にも役立てたいと思ひ、植物分類に従って並べた。

ポット植えのメリットとして、その小ささから「並べ替えが自由である」ことがある。大きくしてしまうと、動かせなくなるため、似た者同士を比べることができない。ポット植えを分類群順に並べると、似た者同士が隣り合わせになり、どこが似ていてどこが違うのかが非常に分かりやすい。これは、昆虫の標本箱に通ずるものがある。

通ずるものがある。

植物で用いられる「おしば標本」では、広げると結構な場所をとる。また、樹木においては枝先や花の咲いているところなど、部分的なものになってしまう。ポット植えにしてみると、小さい植物の中に葉・枝・根などがすべて揃っていることや、並べて比較ができる、生きている状態で触ってみることができる、などのメリットがある。

ポット植えは、「実物をさわってもらう」ことによる情報量が多いため、子どもたちにとっても良いものである。

実物が持っている情報量は、なかなか「活字」にならない部分が多い。図鑑は数が多く、それぞれに詳細に情報が盛り込まれ、知識の宝庫であるが、実物に触れないとわからない部分も多い。

また、情報を鵜呑みにしないことも大切である。アレチヌスビトハギを例にみると、図鑑によっては「一年草」と書いてある。一年草は種から育ってその年のうちに種をばらまき、死んでしまうサイクルとされているため、実が成熟する前に草刈をすれば防除できると考えられる。しかし、2012年に持ち帰ったアレチヌスビトハギは、今現在でも生きています。つまり、一年草ではなく、地下茎や根が活着している多年草である。防除にあたっては、草刈だけで済むものではなく、根から引き抜かないと意味がない。図鑑に書かれている内容について、実物で確認することも必要である。

ポット植えの他のメリットとして、季節ごとの植物の様子を見ることができる。図鑑では、1つの本の中ではなかなかそこまでの情報は記載されない。図鑑に載っていない情報がここにある。

○自宅で見られる生きものつながり

拾った実や種などを片端から植えていったところ、現在ではポットが500種、2300個くらいになってしまった。最初は地面に平置きしていたが、現在はホームセンターなどで売っているミニ温室のフードを外した状態でポットを管理している。また、自宅2階の2部屋は、それぞれ昆虫の書庫・植物の書庫となっている。

緑があれば、どこからともなく昆虫類など動物がやってくる。ベニシジミ、ヤマトシジミ、スズメガ、カノコガなどのほか、鳥がやってきてフンによる種子散布をされることもある。アゲハチョウがミカン科の植物に産卵するため、ミカン科の植物は葉が食べられてしまい育たない。また、小さな世界での食物連鎖も起きており、去年はアゲハの幼虫はセグロアシナガバチに肉団子にされ、セグロアシナガバチの巣はヒメスズメバチに襲撃され壊滅してしまったところが観察された。

昆虫以外にも、チャコウラナメクジやオカダンゴムシなどがみられる。彼らは芽生えを食べてしまうので、自分にとって敵のような存在であるが、枯葉を分解する役割も担っているため、一概に敵扱いはできない。



○おわりに

今年から海上の森の種も集めている。今後も昆虫調査を続けながら、海上の森で拾った種で植物のポット植えを作っていく、いつか展示もできたらと思っている。

ご協力いただいている皆さんに感謝いたします。